

KCSSES

News letter No.37
MARCH 2022第46回神戸女学院大学
英語英文学会 (KCSSES) 大会報告

英文学科長 松尾 歩

霜月の澄んだ空に金木犀が輝き、甘く爽やかな香りがキャンパス全体を包んでいた、去る11月5日、英文学科卒業生・大学院生・大学院修了生の研究発展および在学生の向学意欲の向上を目的として設立された神戸女学院大学英語英文学会 (KCSSES) の第46回目をオンラインで開催することができました。今回は英米文学文化コースの担当で、前半は本学大学院英文学専攻で学び、その後も研究を続けておられる研究科研究生の津村真衣氏と、学習院大学人文科学研究科客員所員の三木はるか氏の発表を拝聴しました。両名ともJohn Ruskinに言及した研究発表で、活発な質疑応答、そして2つの発表にまたがった論議が繰り広げられました。

後半の特別講演では京都大学人文科学研究所教授の小関隆先生に「人文学 beyond 2020の可能性」というタイトルで歴史学と文学の分野を横断するご講演を賜りました。小関先生の講演は、パンデミックというタイムリーなトピックで、まずは2020年問題として、医療、人種、貧富の格差が明白になったというところからお話が始まりました。またブレクジット (Brexit) 騒動ではイギリスの民主主義の根幹がおびやかされたことに言及され、当事者として2020年問題が人文学に何を求めているのか？人文学が何に貢献できるか？についての先生のお考えをご共有くださいました。大変興味深かったのは、近年新型コロナウイルスの感染拡大の中で多くの現象が数値化されている中、個人の特徴などが忘れられていく、その個々の特徴や個々を取り巻く状況をストーリーを使って伝えていくのが文学者の役割である、というお考えで、その根底にある英文学を勉強する重要さを再び思い出すことができ、新鮮でした。

昨年と同様オンライン開催で多くの参加者が集まり、質疑応答などもスムーズに進みました。講演を録画させていただき何度も聞き直すこともでき、新しい技術のもたらす恩恵を体験しました。また、自身の研究との関わりについて考えたり、新しい視点を得ることができる好機でもありました。最後に、この学会のためにご協力ご支援くださいましたKCSSESの

会員の皆さま、教職員をはじめ、コミュニティの皆さまにも御礼申し上げます。

特別講演

人文学 beyond 2020 の可能性

小関 隆

(京都大学人文科学研究所教授)

「2020年問題」と人文学

なぜ「2020年問題」なのか？2020年から世界中に広がったコロナ禍（発端は2019年にあるが）は、よく指摘される通り、いわば抜き打ちテストであって、私たちの社会が以前から抱えていた貧困や格差、差別や暴力を露呈させた。さらに、パンデミックをひとまず切り離しても、2020年はブレクシットが現実になった年であったし、現職のアメリカ大統領が大統領選の開票作業の停止を求めるに及んだ年でもあった。BLM やオリンピックをはじめ、2020年に顕在化した現代世界の「暗部」は他にも少なくない。私たちが直面しているのはコロナをその一部とする「2020年問題」だと捉えるべきだろう。そして、「2020年問題」は、これまでの人文学が暗黙の前提としてきたいくつかの想定が根底的に揺らいでいる現状を直視し、そうした想定を再審して、これからの人文学がとるべき方向性を模索することを私たちに求めている。

コロナの死者・感染者数の推移を注視する毎日を送る中でしばしば想起されたのが、ティモシー・スナイダー『ブラッドランド』が提起した「数値を人に戻せ」という論点である。どんな境遇の人がどんな経緯でどんなふうになくなったかは二の次とし、なによりもまず数の増減に一喜一憂する「2020年の感性」の根底に横たわっているのは、人間の個性を捨象して数値に還元し、人間を使用価値よりも交換価値のレベルで把握する新自由主義だろう。パンデミックによっていよいよ浸透したかに見えるこうした感性に抵抗するための手がかりとして、伝記的研究をとりあげてみたい。

伝記的研究のポテンシャル

AIとビッグ・データの時代にあえて個々人に照準を合わせるのは、核兵器に竹槍で抗うようなものかもしれないが、パーソナルな経験に着目する必要性はいつそう切実になっている。自然災害と並んで、「予測しがたいヒューマン・ファクター」は歴史に「偶然」を持ち込む最たるものに他ならず、個性をもった人間をクロース・アップすることには、「客観的」「科学的」であろうとし、そう装う歴史学がやりがちな歴史の神秘化に「偶然」の導入を通じて抗う意味がある。そして、通説の妥当性を批判的に点検し、時には説得力をもって矯正・修正する力を伝記的研究が豊かに備えていることは、あらためて注目されるに値する。マクロヒストリカルな解釈との齟齬をわかりやすく浮き彫りにし、通説の孕む問題性を端的に明るみに出す力において、伝記的研究が掘り起こす個々人の固有の経験はしばしば抜かしている。

また、やや次元の違う話になるが、一般読者（非専門家）との距離の近さは特筆すべき伝記的研究の強みである。「役に立たない」との批判に日々さらされ、幅広い層の読者に働きかける方策を模索しなければならない歴史学にとって、公衆の歴史への関心を喚起するための有効なツールを軽んじることは許されない。

伝記的アプローチを活用して「数値を人に」を実践しようとする歴史学 beyond 2020 は、不可避免的に文学的営為に近づく。「科学」「客観」「史料」「実証」に立て籠もるのではなく、自分が文学ないし芸術に近いことをやっているとの自覚をはっきりともち、禁忌されがちな想像力・空想力を駆使すること、「2020年問題」を引き受けようとする歴史家、さらには人文学者全般に要請されているのはこれではないだろうか？ 念のため付け加えるなら、歴史叙述と歴史小説とは同質であって区別できない、などと主張しているわけではない。真実の解明を、それが可能とは限らないにせよ、究極の目的とするか否かにおいて、両者は分岐するからである。

人文学の「語り」

歴史学の話を超えて、今日、日本のみならず世界の至るところで見られる人文学の窮状についても少しだけ考えておきたい。危機の根源には、人文学もまた自然科学や社会科学と同じく科学であると主張することで、「一人前の学問」の地位を保とうと試みてきた歴史的経緯があるように思われる。もちろん、客観的な根拠に基づく分析的な実証の重要性に異論を差し挟む余地はなく、科学たらんとしたことにはプラスの面も間違いなくあったが、しかし、主観性を棚上げし、偶然性を過小評価して、法則的必然らしきものを追求せんとした結果、人文学に宿っていたはずの「語り」の力が衰えてしまったのは、やはり由々しきことといわねばならない。「語り」の衰微は



価値判断の回避と連動し、そこから招かれたのが、たしかに豊富な情報が提供されてはいるのだが一向に像を結ばない、ディテールが集積されるばかりで全体が見えてこない、という私たちが日頃からよく目にする事態に他ならない。

「語り」と価値判断を放棄してしまえば、人文学にできるのはデータ収集だけ、集めたデータを総合して大きな絵柄を描くことはできない。AIという神に奉仕する働きバチの役割を拒否し、人間にしかできない人文学、困難な時代を生きる人々に指針を提示できるような人文学 beyond 2020 を遂行しようとするなら、喫緊の課題は多くの受け手に届くような「語り」の創出であり、それに依拠した再読に耐える「作品」の生産ということになるだろう。

発表要旨

宗教的体験へと繋がる美しいものとの 出会い―ラスキンとコールリッジ

津村 真衣

(神戸女学院大学文学研究科)

芸術・社会批評家として知られるジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) は、著作『近代画家論』第二巻 (1846) で、生命美 (Vital Beauty) の体験がもたらす心の状態を「万物の幸福から最大量の喜びを受容する心情の親切心と非利己的満足」(Modern Painters II, 148) と説明する。その例のひとつとして挙げられているのが、ロマン派詩人 S. T. コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) の「老水夫の詩」(1798) である。小さきものへの愛、共感、そして神や自然との繋がり、18世紀末から19世紀初頭を生きたコールリッジ同様、ヴィクトリア朝期のラスキンにとっても同時代の人々に喚起する必要があるテーマであった。ロマン派詩人の中では、自然への関心・共感から特にワーズワスとの比較がなされるラスキンだが、本発表ではあえて、同じく美的体験を大切にしたコールリッジの詩を糸口として、コールリッジの美的体験の捉え方と合わせて、

ラスキンの美学論を考察する。先行研究にはKaiser (1999) や Ball (2013) があるが、美の知覚と創造を含めた一連の美的体験のプロセスや美的体験に付随する宗教的な意味合いが十分に扱われていない。

本発表では、ラスキンのコールリッジへの直接的な言及をスタート地点としてラスキンとコールリッジの美の捉え方を比較することで、両者が美しいものとの出会いを、想像力を基盤とした全人的な宗教的体験として捉え、その背後には共通する宗教的背景があったことを提示した。まず、ラスキンの美の捉え方を、心の働きとしてのテオリアや想像力、そしてモラル感情を中心に紐解き、次に、『政治家必携の書』(1816) や『文学的自叙伝』(1817) を中心に、コールリッジの美学論に焦点をあてながら「老水夫の詩」を見ていくことで、ラスキンの美学論に通じるロマン主義的な美的体験の捉え方を提示した。奴隷貿易に固執する物質主義や功利主義からくる貧困が蔓延り、信仰の喪失を象徴するような自然破壊が続く時代において、愛や他者との繋がり、没我状態を可能にする美しいものとの出会いが、両者にとってどのような意味を持ちえたのかを考察した。

発表要旨

博士論文報告

近代日本における美術批評家ジョン・ラスキンの受容史(1884～1934年)

三木はるか

学習院大学人文科学研究科博士後期課程修了
博士(美術史学)

学習院大学人文科学研究所客員所員

1931年6月8日、神戸基督教青年会館で「ラスキンの遺品展覧会」と講演会が開催された。講演会のプログラムには、神戸女学院の英文学者、菱沼平治の名も見える。この講演会には150人もの聴衆が、展覧会(右図)には300人余りの来場者が訪れ、これを機に関西に「ラスキン・ソサイティをつくり」、「ラスキンをさらに深く研究せんとすの計画」も生まれた。

19世紀イギリスを代表する美術批評家ジョン・ラスキン(1819～1900)の生涯と思想とは、当時なぜこれほどの関心を集めたのだろうか。

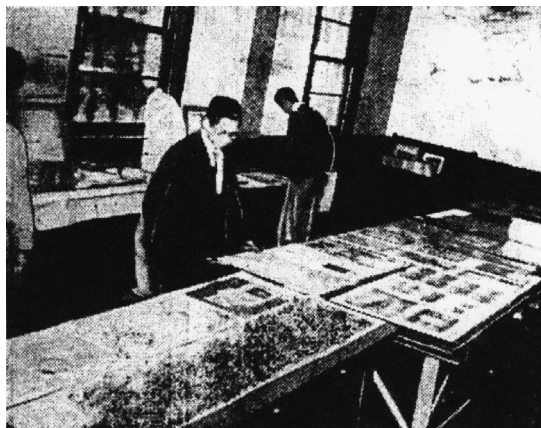
近代日本のラスキン受容については、1970年代後半以来、社会思想史学者の木村正身によるラスキン関連邦文献目録の集成に加え、1997年の「自然の美・生活の美——ジョン・ラスキンと近代日本展」等の展覧会開催を契機として、研究が進められてきた。展覧会・展覧会図録という性格上、ラスキンの原著や素描、その影響下にあった日本の画家の作例、邦訳書

等の視覚資料によって受容の様相が鮮やかに照らし出されてきた一方、ラスキン受容の中核を成す言説については、これまで詳細な史的検討はなされてこなかった。

筆者の博士論文では、日本の美術ジャーナリズムの草分けである『大日本美術新報』にラスキンの名が登場する1884年から、御木本隆三が東京銀座に「ラスキン文庫」を開設する1934年までの半世紀を考察の対象とし、美術批評家としてのラスキンに関する言説はどのように語り継がれ、変化していったのか、語り手とその語りの内容を精査することによって、受容の諸相を一つの通史として提示した。

なお、日本近代の各言説の中でラスキンの言葉が日本語に翻訳され、引用された場合、可能なかぎりその出典となった原著と引用箇所を原文を特定した。これによって各々の受容者が、ラスキンの膨大な著述の中からどの著作を選び、どの一節を引用し、それをどのように解釈・翻訳していたかを明確にした。

この半世紀の受容史を通観するにあたり、1884～1895年を第一期、1896～1916年を第二期、1917～1934年を第三期に区分した。その理由は以下による。まず第一期の受容の主要な担い手である岡倉覚三、坪内逍遙、松本源太郎が東京大学でアーネスト・フェノロサに学んだ知識人による言説の波が、文献史上1895年を境に収まること、その後は1896年に東京美術学校に増設された西洋画科で教鞭を執った久米桂一郎や岩村透、京都市美術工芸学校で教えた竹内栖鳳ら美術学校の美術教育者による言説が目立つようになること、1917年のロシア革命以後は、ラスキンを受容する社会的背景の変化により、その言説も大きく変化し、また御木本のラスキン展に象徴されるように、言説のみならず社会活動を伴うようになったことによる。加えて「民芸運動の揺籃期」と呼ばれる、柳宗悦と陶芸家バーナード・リーチの我孫子時代が本格的に始まるのも、第三期の初年1917年である。



「ラスキンの遺品展覧会」の会場写真
『神戸又新日報』1931年6月8日付

本発表では、受容の前提となるラスキンの絵画論の特徴を確認した上で、上記第一期から第三期までの特徴を松本源太郎（1859～1925）、岩村透（1870～1917）、島崎藤村（1872～1943）、柳宗悦（1889～1961）、御木本隆三（1893～1971）の受容を例に述べた。それによって、日本の造形美術の伝統と親和性のあるラスキンの絵画論を選択的に参照したのが、近代日本のラスキン受容であり、西洋近代の美術と日本前近代の美術を媒介し、近代日本の美術・美術観の創出に間接的に介在したのが、ラスキンの美術論であったことを示した。

国際学会発表(会員氏名ABC順)

*石川有香 氏

“Enhancing Publication Productivity: The Genre-Based Approach for Teaching Research Article Writing to Graduate Students of EST in Japan” 中国、広西大学で開催されたThe 4th Annual Conference of Asia ESP & the 9th Chinese National Symposium on ESP (2021年8月17-19日)にて研究発表。

“A Comparative Study of Metadiscourse Markers in Engineering Abstracts Written by Graduate Students and Professional Researchers” チェコ、マサリク大学で開催されたNinth Brno Conference on Linguistics Studies in English 2021 (2021年9月16-17日)にて研究発表。

*津村真衣 氏

“Building the Temple of Solomon: John Ruskin's Crusade for Rescuing Art and Aesthetic Experience” アメリカ、ラスベガスで開催されたThe 118th Annual PAMLA Conference (2021年11月11-14日)のオンラインセッションにて研究発表。

*鶴野ひろ子 氏

“Teaching Emily Dickinson in Japan,” *The Emily Dickinson International Society Bulletin* 33. 1 (May/June 2021) : 12-14.

“Japanese Approach to Emily Dickinson's Poetry” in “Forum: Japanizing C19 American Literary Studies,” *J19: The Journal for Nineteenth-Century Americanists* 9.2 (Fall 2021) : 443-451. (University of Pennsylvania Press)

会員による出版紹介(会員氏名ABC順)

◇風呂本惇子 氏

『キンドレッド』(オクティヴィア・E・パトラー 著、共訳、河出文庫、2021年11月刊)

◇石川有香 氏

『ジャンルとしての工学英語—理論と実践—』(大学教育出版、2021年刊)

◇古東佐知子 氏

「クロード・マッケー—ハーレムとカリブのアウトサイダー」『ハーレム・ルネサンス—〈ニュー・ニグロ〉の文化社会批評』(松本昇 監修、深瀬有希子・常山菜穂子・中垣恒太郎 編著、明石書店、2021年8月刊) pp. 198-216.

◇吉田純子 氏

「思春期文学の少女たちがトラウマを脱するとき—『若草物語』と『ウィー ツィー・バット』の場合」『立命館言語文化研究』32-4. 2021年3月刊) pp. 97-111.

「ロイス・ラウリーの『ギャザリング・ブルー』にみる〈希望〉の表象—キラはなぜ青を集めるのか?」(『Tinker Bell』66、2021年3月刊) pp. 51-66.

英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開始し、今年度も担当教員からの推薦による11名の応募を受けつけた。2月に英米文学文化、言語コミュニケーション、通訳・翻訳プログラム、グローバル・スタディーズの各部門で選考を行い、最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者を以下の通り決定した。

英米文学文化 (応募者1名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E18145 田中 綾香

言語コミュニケーション (応募者4名)

<最優秀賞>

E18115 尾上 香

<優秀賞>

E18142 武信 杏奈

通訳・翻訳プログラム（応募者2名）

＜最優秀賞＞

E18154 津田 愛果

＜優秀賞＞

E18101 奈良井 莉織

グローバル・スタディーズ（応募者4名）

＜最優秀賞＞

E18098 中西 初寧

＜優秀賞＞

E18015 藤波 愛琳

E18038 井下 清楓

E18157 矢部 瑞季

記念賞

2021年度、以下の学生に対して、次の学内記念賞が授与されました。

タルカット 記念賞 E19157 山崎 桃香

デフォレスト 記念賞 E19069 曲 美卯

女性学インスティテュート賞(優秀賞)
卒業生 徳富 郁香

大島初枝 記念賞 E19111 酒井 由菜

キャンパスニュース

＜退職＞

溝口薫教授 定年退職・名誉教授
Yolanda Alfaro TSUDA教授 定年退職・名誉教授
*我喜屋まり子客員教授は、2021年8月に1年間の任期を終えられました。

＜栄誉＞

*英文学科 古村敏明教授がご著書“Lost Loss in American Elegiac Poetry: Tracing Inaccessible Grief from Stevens to Post-9/11”で第6回(2021)日本アメリカ文学会賞を受賞されました。

＜着任＞

瀬戸智子准教授 2022年4月

神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)

(2005年 9月22日改訂)

(2010年 3月 2日改訂)

(1) 名称

本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。

(2) 目的

本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文文学専攻修了生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

(3) 構成

本学英文学科卒業生、大学院英文文学専攻修了生有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

(4) 活動

年一回、英語英文学会大会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。
その他。

(5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。

(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

I. 大会での発表について

(1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、KCSSES運営委員会で審査の上、決定する。

II. 維持費・参加費について

(1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
(2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
(3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
(4) (3) に関しては、KCSSES専用の口座を利用する。



編 集 後 記

今年度もKCSES学会員の皆さまには、研究活動、出版のご連絡をいただきありがとうございました。昨年度同様、オンラインでの学会開催でしたが、人文学の学びを通し、瞬時に多くの方々と異なりを越え、繋がって豊かな時間を共に創り出せた嬉しい学会となりました。ご協力に感謝申し上げます。なお、厚かましいお願いで恐縮ですが、神戸女学院教育振興会にご寄付を頂きます際には、学生たちの研究活動の補助に用いさせて頂きたく、「英文学科学生のために」と一言お書き添え頂けましたら幸いです。

皆さまのご健康と益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

KCSES Newsletter編集委員

(2021年度運営委員)

(ABC順)

○古東 佐知子 ○松尾 歩 ○Goran Vaage ○和氣 節子

KCSES Newsletter No. 37

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

2022年3月発行